

開会挨拶

大谷 いづみ

(立命館大学産業社会学部／生存学研究所)

こんにちは。生存学研究所副所長をおおせつかっております、産業社会学部大谷いづみです。当研究所支援テクノロジー開発、アクセシビリティ・プロジェクトの研究代表と、今回、共催させていただいているポストコロナ・プロジェクトの研究代表もつとめています。ご挨拶代わりに、少し思い出話をさせていただきたいと思えます。

■「障害」の多様性と個別性

わたしがスクリーンに映し出された文字通訳、当時は要約筆記といっていました、これをはじめてみたのは、2004年の第1回障害学会だったと思いますが、実は覚えているのは、会場校だった静岡県立大学のもよりのバス停を降りてから、キャンパス内の学会会場まで延々と続くゆるやかな階段を上っていったことだけなんです。わたしは現在、週何回かの訪問介護と電動車椅子を常時利用していますが、その時には両下肢具をつけてT字ステッキで歩けてはいたものの、片膝にロックがかかっている曲がらない。だから、階段や坂はつらくて、それが延々と続くように思えて、覚えているのは、ほとんどそれだけです。現在のわたしなら、愛車のアメリカ製ハンドル形電動車椅子でゆるやかなスロープを誰よりも早く駆け上がることができますが、当時のわたしには、それが永遠に続くバリアに見えました。講演でも報告にも文字通訳があったはずですが、全く記憶にありません。

スクリーンに映し出される文字通訳が記憶にあらわれるのは、関西大学でおこなわれた翌2005年の第2回障害学会で、その時は立命館大学先端総合学術研究科の後期課程大学院生として報告した時でした。手話以外にもこういう方法があると驚いたとともに、学会当日の公平性を保つためにと、事前に報告原稿と資料の提出をもとめられ、当日の変更がみとめられなかったことに感じた「窮屈さ」でした。

情報保障の企画の挨拶でこんなお話をするのは場違いなことと思われるかもしれませんが、「下肢障害者」とひと括りにされる立場であっても、バリアを越えるた

めに何が必要なのかは障害の軽重や使用するツールによって大きく異なります。まして、障害の種類が違えば、相当な想像力を持つ必要がある、という、苦い実例です。

■本日の構成

今日は二部構成になっています。第1部は、コロナ禍以後の2年間に、生存学研究所がおこなってきたオンライン企画を陰で支えてきたオンライン事務局の橋口昌治さん、安田智博さん、中井良平さんの三人から、文字通りシャドウワークを可視化していただきます。そして、アクセシビリティ・プロジェクトのマネジメントを一手にひきうけている当研究所の川端美季・准教授より、立命館大学土曜講座という、本学の伝統ある公開講座におけるオンライン企画についてお話しいたします。ここでは、同一人物からとおもわれる匿名の参加者からの、登壇者へのリスペクトを欠く質問が多数だされ、はからずも「匿名性」と「自由な議論」とは何かを根本から問い直す機会となりました。

わたし自身は、登壇者になることが多かったり、体力にも限りがあって参加できていないイベントもあり、オンライン事務局の大変さについて、聞いてはいたものの、今回、準備段階から今日の今日までとびかう膨大なメールをみても、その大変さはあまりあるものがあります。失敗談もできます。大切なのは、失敗からこそ見えてくるものがあり、学ぶことがあるということです。それを記録しアーカイブしていくことが、当研究所の仕事の重要な柱でもあります。

第2部は、まずは、実際に情報保障に携わってこられた、NPO法人「ゆに」の窪崎泰紀さんと障害学生支援にたずさわっておられる聴覚障害当事者の甲斐更紗さんにお話しいたします。つづいて、文字通訳・手話通訳という名称が端的に物語っているように、情報保障は、日本語を母語としない留学生にも通じることを、いちはやく私たちにつたえてくれた、シン・ジュヒョンさんからお話しいたします。そして、本学先端研で障害を持つ大学院生生活を送り、いまは産業社会学部で障害を持つ

教員として、障害を持たない「普通」の先生方とともに教える立場に立つ大谷から、両者をまたぐお話をさせていただきたいと思います。

研究所の取り組み」の講演に加筆修正したものである。

■情報保障と重度障害をもつ校友のかたち

挨拶の最後に、この2年、本研究所の情報保障をお願いしてきた手話通訳のミライロ・コネクトさんとNPO法人「ゆに」さんについて少しお話しさせて下さい。ミライロ・コネクトさんも「ゆに」さんも、その情報保障の精度は非常に高く、信頼できるものです。それには、「ゆに」の設立者である、先般亡くなられた故 佐藤謙さん、株式会社ミライロの設立者である垣内俊也さん、いずれも、本立命館大学の校友であり、かつ、重度の障害をもっておられますが、文字通りいのちがけで本学での学生生活を送られた経験と、そこで築いた交流を「ゆに」やミライロの設立につなげ、障害学生支援、障害者支援の活動へと発展されたことと、深く関わっていると、わたしは考えています。

「ゆに」の設立者である、故 佐藤謙さんについて、もう少しお時間いただきたく思います。佐藤謙さんは、わたしが東京で高校教師在職のまま本学先端総合学術研究科に一期生として進学したのとおなじ、2003年春に、本学産業社会学部に入學されました。入學されたときはお母様おひとりが重い電動車椅子を介助して授業にでられたとのこと。翌2004年春、わたしは高校教師を辞して京都にうつり、スキップして2006年3月に学位取得した後、縁あって2007年春に産業社会学部に着任したのですが、その年、謙さんは4回生で、気管切開して人工呼吸器をつけられ、総計6年掛けて2009年に卒業されました。その間に、謙さんをサポートする学生ボランティア団体「さぼーとnet」が結成され、それが元になって、現在のNPO法人「ゆに」の設立につながったとうかがっています。佐藤謙さんは、昨年、2020年12月に急逝されました。わたしはごく近くにいながらお目にかかる機会なく、突然の別れとなりましたが、ほんの1週間ほど前に、大谷ゼミの一期生と二期生が、謙さんのサポートボランティアにあっていたことがわかりました。この不思議なご縁を、わたしたちが生きるこの社会の未来にかすために、今日のセミナーがひとつの機会になることを願っております。

付記：本稿は、2021年11月20日に行われたオンラインセミナー「情報保障のいまとこれから——生存学